

令和3年度 報告書

2021年9月14日(Tue.)～9月22日(Wed.)

東京大学文学部夏期特別プログラム

Report on the Special Summer Program of the University of Tokyo Faculty of Letters,
September 14-22, 2021 in Hokkaido

知床五湖



目次

1. 巻頭挨拶	
「変容への期待」	
東京大学大学院人文社会系研究科長・文学部長 秋山 聡	2
2. サマープログラムの概要	3
3. プログラム実施内容	4
4. 受講者レポート	
① 日誌形式レポート	8
岡 夏希	【教養学部 2年】
和久井 亮	【教養学部 3年】
周 佳穎	【教養学部 1年】
CHIA KAH YING MONA	【文学部 4年】
② テーマ別レポート	12
岡田 悠暉	【教養学部 2年】
北里 萌音	【教養学部 2年】
小池 晃弘	【文学部 3年】
田村 天	【文学部 3年】
5. 総括	
ウイズ・コロナの特別プログラム	
東京大学大学院人文社会系研究科・教授 佐藤 宏之	16

1 巻頭挨拶

変容への期待

本プログラムは、昨年度は中止のやむなきにいたりました。新型コロナウイルス感染がなかなか終息を迎えず、今年度も中止が危ぶまれていましたが、関係の先生方、事務の方々の献身的な努力によって、学内の留学生と日本人学生を対象としているにもかかわらず英語を用いる、という変則的なかたちではありますが、どうにか実施できることとなりました。ことばを重視する文学部であっても、身体を用いてのさまざまな体験はとても重要と考えられています。今回のプログラムは、可能な限り万全な感染対策を講じつつ実施されます。ぜひ久しぶりに学外、野外での実習的活動を楽しんでもらえればと思います。

本学で学ぶみなさんは、東京と故郷以外の諸地域のことをあまり知らないのではないかと思います。留学生のみなさんも、専ら東京で勉学に励むのに忙しく、日本の地方の様々なあり様をあまり経験はしていないでしょう。東京をはじめとする大都会での常識は、地方では通じないことも少なくありません。まだ柔軟な考え方を持つうちに、地方の実際を多少とも知ることは、社会に出るにせよ、研究の世界に進むにせよ、人としての成長に不可欠なことと思われまふ。本プログラムでは専ら考古学や文化資源学を学びますが、同時

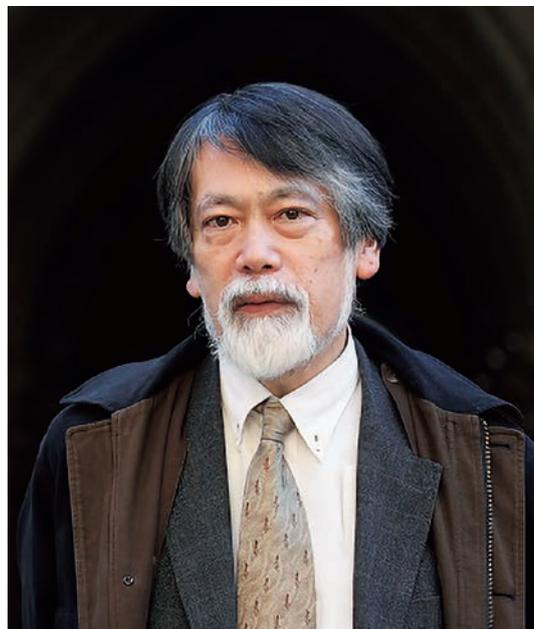
に常呂町に一定期間在住し、仲間と「同じ釜の飯」を食しつつ、お互いを深く知り合い、また地域の人々と交流することになります。とかく東大生はヤワだと言われてきましたが、それは学外や研究の世界の外での経験がまだ少なく、学外で生起する、自らの常識や準拠枠の埒外にある事象に臨機応変に対応しきれないところがあるからでしょう。そういう点で、本プログラムは考古学に関する知見を深めながら、自らの生活圏を押し広げる可能性を秘めているとも言えるのです。

文明の発達とは、その対価として、身体と自然との間に大きな乖離をもたらしました。我々の足裏は、日頃は何層ものレイヤーによって、大地から隔てられています。地面の形状や柔らかさを、手や足で感知することは滅多にありません。常呂での実習を通して、大地と密に接する体験を持つことは、きっとみなさんの身体の原初的感覚を覚醒させ、都会生活者としての自らを必ずや相対化してくれるものと思われまふ。

常呂での体験によるみなさんの何らかの変容（個人差はあるでしょうけれども）に期待します。また、末尾ながら、例年以上に大変であったことが容易に想像できる、今回のプログラムの実施にご尽力いただいた全ての皆さまに深謝申し上げます。

東京大学大学院人文社会系研究科長・文学部長

秋山 聰



2 サマープログラムの概要

実施期間	● 2021年9月14日(火)～9月22日(水)
内 容	● 9月14日 プログラムの趣旨説明・ガイダンス(本郷キャンパスにて) ● 9月15日～9月22日 大学院人文社会系研究科附属常呂実習施設(北海道北見市常呂町)等でのプログラム ・北海道の先史文化概説(講義) ・北見市、網走市、斜里町、湧別町周辺の遺跡、博物館の見学 ・世界自然遺産知床の見学 ・勾玉製作体験 ・「日本の伝統演劇における蝦夷族長アテルイの物語」(講義) ・「食の多様性、エコシステム、レジリエンス、文化遺産景観」(ワークショップ)
担当講師	● 熊木 俊朗(大学院人文社会系研究科 教授) アンネグレート・ベルクマン(大学院人文社会系研究科 特任准教授) 羽生 淳子(カリフォルニア大学バークレー校 教授)
募集方法等	● 2021年4月に文学部より告知。選考後、6月中旬に通知。
受講者	● 本学の学部学生8名【前期課程学生4名、後期課程学生4名】(うち留学生2名)
支援者 (プログラムに同行)	● 太田 圭(大学院人文社会系研究科 助教) 夏木 大吾(大学院人文社会系研究科 特任助教) 池山 史華(大学院人文社会系研究科 博士課程大学院学生)
協 力	● 北見市教育委員会等

3 プログラム実施内容



世界遺産 知床見学 (知床五湖にて記念撮影)

今年度の東京大学部夏期特別プログラムは、東京大学に在籍する学部生と外国人学部留学生を対象に実施された。また、例年は東京の部と常呂の部で構成されていたが、今年度は期間を短縮し、常呂のみでのプログラム催行となった。プログラムの実施にあたっては、新型コロナウイルス感染症の影響を考慮し、プログラム開始前から参加学生および教職員の体調管理報告や抗原検査を行うなど、十分な対策をとりながら準備が進められた。初日の開講式およびガイダンスでは秋山聡研究科長、佐藤宏之教授が受講者を歓迎し、プログラムの趣旨説明を行った。その後、受講者たちが英語で自己紹介を行い、各人の抱負を語った。二日目以降は、北海道に移動し、人文社会系研究科の附属施設である常呂実習施設で北海道の歴史遺産と自然遺産について体験的に学んだ。受講者たちは附属の学生宿舎に泊まりながら課題をこなし、感染症対策をとりつつ受講者同士や参加スタッフとの交流を深めた。プログラム開始直前

に緊急事態宣言の延長が決定され、それによりいくつかの予定変更も生じたが、概ね予定どおりプログラムは進行した。最終日には各受講者がレポートを提出し、担当講師から修了証の授与がおこなわれた。

● 北海道の先史文化概説 (講義)

常呂でのプログラムは、「北海道の歴史遺産と自然遺産について体験を通じて学ぶ」ことを主眼としている。プログラム全体への理解を深めるため、熊木俊朗講師が「Prehistory in Hokkaido」と題し、北海道の先史文化の概要について講義をおこなった。本州とは異なる歩みをみせる北海道の先史文化の特徴について、旧石器時代から縄文、続縄文時代、オホーツク・擦文文化、そしてアイヌ文化の成立に至る考古学的な歴史の流れを、本州やロシア極東との交流・影響関係にも注目しながら順を追って紹介した。受講者からは、当時の衣食住や儀礼等に関して活発な質問がなされ、北海道における独特な先史



開講式 (法文2号館でのガイダンス風景)



常呂実習施設での考古学座学



常呂実習施設周辺の遺跡見学（ところ遺跡の森にて担当講師の解説を受ける参加者）

文化に対する関心と、このプログラムへの期待の高さがうかがわれた。

● 勾玉の製作体験

縄文時代の勾玉を実際に製作する体験を通じて、古代のモノづくりに対する理解を深めた。題材としたのは常呂の遺跡から出土した縄文時代のヒスイ製の勾玉で、実際の製作では加工しやすい滑石を材料とした。各受講者は滑石に好きな勾玉の形を転写した後、約2時間かけて手作業で削って磨きをかけ、1個の勾玉を完成させた。また、製作作業にあわせて、当時の加工技術や原材料と製品の流通についても熊本講師から説明がなされた。講師から当時の原材料であるヒスイを加工する場合には滑石よりも遙かに労力を必要とすることが説明され、受講者は、縄文時代の技術と、勾玉の「威信材」としての価値についても理解することができた。



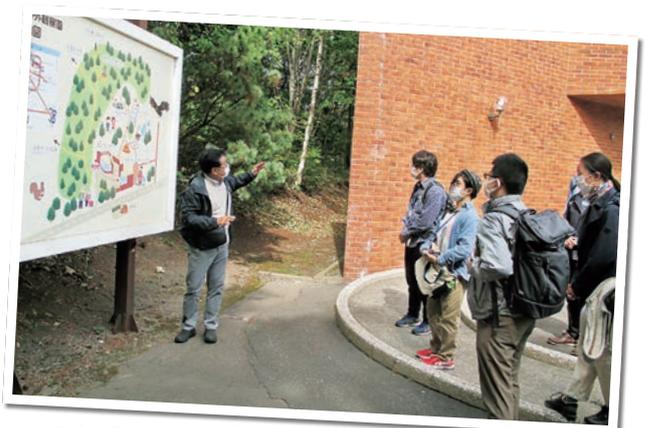
勾玉の製作体験

● 実習施設周辺の遺跡見学

実習施設の周辺には、国指定の史跡「常呂遺跡」を中心として大規模な先史文化の遺跡が数多く存在している。このうち、史跡「常呂遺跡」の各地点（ところ遺跡の森地点、栄浦第二遺跡、トコロチャシ跡遺跡）、岐阜2遺跡、トコロ貝塚を見学し、遺跡の保護と活用に対する取り組みを実例で学んだ。遺跡では、地表面に窪みで残る竪穴住居跡や、復元された竪穴住居、アイヌ文化の砦の跡（チャシ）に掘られた壕等を見学し、トコロチャシ跡遺跡では遺跡公園が整備されていく様子を目の当たりにした。遺跡の現状と周辺の景観を実際に見ることで、歴史遺産を体感し、地域における歴史の歩みを深く理解することができた。

● 世界遺産 知床見学

世界遺産に登録されている知床を訪れ、自然遺産への登録理由となった多様な生態環境とその相互関係、豊かな生産性という特質を実見するとともに、



世界遺産 知床見学
（斜里町立知床博物館にて担当講師の解説を受ける参加者）

3 プログラム実施内容

自然の保全と人の利用との両立を目指す保護と管理のあり方についても学んだ。斜里町ウトロまでの行程を含む移動は全て車で行き、斜里町立知床博物館、知床世界遺産センター、知床峠、知床五湖、オシニコシンの滝といった主要地点を巡回した。受講者は火山、森林、湖沼、断崖などの多様な景観に触れながら、それらの具体的な保護管理の方法を現地で視察した。当日の知床は晴れており、ウトロ市街地や知床五湖では美しい海や山々の自然を望むことができたが、知床峠では景色の展望や集合写真の撮影が困難なほどの濃霧と強風に遭遇した。それもまた、知床の豊かな生態環境とそれを育む気候を体感するよい経験となった。

● 博物館見学

東大常呂実習施設の近隣に位置する各博物館、具体的には、ところ遺跡の館、常呂町郷土資料館（以上北見市常呂町内）、博物館網走監獄、湧別町立郷土博物館ふるさと館 JRY を見学した。これらの館はいずれも地域の特色ある歴史や文化を紹介した博物館であり、受講者は考古学・民族・近代資料や歴史的建造物を見学しながら、地域の歴史遺産について理解を深めた。また、博物館や学芸員の役割に注目する受講者も多くあり、特に網走監獄やふるさと館 JRY では、見学者を引き付けるような魅力的な展示手法や解説について強い関心が向けられている。



博物館見学（湧別町ふるさと館 JRY にて学芸員の解説を受ける参加者）

● 日本の伝統演劇における蝦夷族長アテルイの物語（講義）

アンネグレート・ベルクマン特任准教授が

“History and Fiction in Japanese (Traditional) Theatre: The case of Aterui –Business as usual?” と題した講義をおこなった。講義では、8世紀末～9世紀初頭に実在した蝦夷の族長アテルイを主人公とした演劇である『阿弖流為』（劇団新感線）、『歌舞伎 NEXT 阿弖流為』（松竹）等が紹介され、これらの作品についてストーリーが解説され、マイノリティーの英雄へのまなざし、史実とフィクションとの関係、伝統芸能に対する知識と表現、演劇表現における文化的・社会的な背景などの観点から、考察がなされた。受講者は、取り上げられた題材を通じて、近現代の日本社会における演劇の不変の本質や、伝統芸能の表現技術を用いて新たな演劇スタイルを創造する意義などについて学んだ。



「日本の伝統演劇における蝦夷族長アテルイの物語」を熱心に聞く参加者

● 食の多様性、エコシステム、レジリエンス、文化遺産景観（ワークショップ）

カリフォルニア大学バークレー校の羽生淳子教授を講師に招き、「Food Diversity, Ecosystem Resilience and Cultural Heritage Landscapes」と題したワークショップが開催された。世界文化遺産に登録された青森県三内丸山遺跡等の縄文時代遺跡を題材に、考古学および民族考古学、古環境学、人類学、生態学、農学などの様々な観点からその先史文化の特質を捉えていく先端的な研究成果が紹介された。小地域社会における経済活動の多様性・規模と長期的持続可能性との密接な関連性について、過去と現在の食糧生産活動を紹介しながら説明された。受講者は、講師の問題提起を受けて、いろいろな価値観に触れながら、歴史文化遺産の捉え方や保存・活用を議論し、多様な生態・文化に対する理解を深めることができた。



修了式



4 受講者レポート ①

■ 日誌形式レポート

岡 夏希、和久井 亮、周 佳穎、CHIA KAH YING MONA

2日目－9月16日

北上する台風から逃げきり、北海道に到着したのが昨日9月15日であった。本日は、晴天の中での活動になった。

午前中は、北海道の縄文時代からアイヌ文化の時代までを扱った、熊木俊朗先生の考古学の座学「Prehistory in Hokkaido」を受けた。初めに、ドローン撮影による史跡「常呂遺跡」の竪穴住居群の航空映像を見せていただいた。竪穴住居跡の窪みに雪が残り、森に白の斑模様浮かび上がっていた。竪穴住居の多さがうかがえるとともに、純粋に、特徴的かつ綺麗な風景だと印象に強く残った。

北海道の歴史的な存在ということ、アイヌ民族のイメージを強く持っていた。しかし、当たり前だが、時代・文化は多種多様である。座学の後に向かった、東京大学常呂資料陳列館やところ遺跡の館で、土器や竪穴住居の説明を読んだり、観察したりすると、それらの相違点が明確に見えてきて、興味深かった。各時代・文化の違いとして、私がとても驚いたことは、時代・文化によって、竪穴住居の窪みの形が違うことだ。私はそれまで竪穴住居のプランは全て方形だと思っていた。例えば、縄文時代では竪穴の平面形が円形、擦文文化では方形であった一方で、オホーツク文化の人々は五角形あるいは六角形であった。また、擦文人が一度使った竪穴を再利用しなかった一方で、オホーツク人は同じ竪穴を使いまわした、といった違いもある。



博物館見学（ところ遺跡の館でアイヌ文化期の展示をみる参加者）

実際に、ところ遺跡の森の中にある、復元住居や竪穴住居の窪みを見て回った。森の中には東京よりも二回りほど大きな蚊が、そこら中に飛んでいた。結んでいた髪を解くことで、なんとか露出していた首を守ることに成功した。

復元された竪穴住居にも入ることができた。実をいうと、竪穴住居に入ったのは、今回が初めてではない。父方の実家が島根県にあり、そこでも中に入り観察した。茅葺き屋根が島根で見たものとは違ったように思えたことが引っかかっている。幼少期のことで本当に記憶があやふやなのだが、土をかぶっ

ていた気がする。今回は調べる時間がなかったが、帰ったら、竪穴住居について少し調べてみたい。竪穴住居といえば、最初に見た、ところ遺跡の森の4号竪穴住居に、「狭っ!」と思ったことを覚えている。4号竪穴住居は当時の標準サイズで、6m四方(36㎡)のもの。ここに5~10人程度住んでいたと推定されている。いくら家具がなくても、10人は入らないのでは……?と思った。ちなみに、国土交通省が出している『住生活基本計画』では、10歳以上の人が5人暮らせる必要最低限の広さを60㎡としている。当時と今との生活概念の乖離を感じた。また、個人的に面白かったことは、アイヌの弓(“ク”)の展示があったことだ。展示されていたアイヌの弓の長さは約110cmであった。私が普段部活で使う弓道の和弓が約221cmで、アイヌ文化の例のほぼ2倍である。ここでも文化の違いを大きく感じた。

いわゆる考古学的な話だけでなく、遺跡や遺物を復元・展示するにあたり、苦労した点や工夫した点のお話も聞かせていただいた。特に、資金面や歴史的正確さの担保、保管状況のお話などは、博物館資料論の授業でも学芸員の大変な点として挙げられていた項目だった。普段の講義と関連づけながら非常に貴重な学びを得られたと実感している。

一通りの学習が終わったあと、自由時間にサロマ湖周辺へと散策に出かけた。曇っていたものの、穏やかな湖と、雲越しの鮮やかな夕焼けの紅に癒された。ただ、日が沈み始めると、急激に気温が下がるのを感じた。ベンチコートのスーツケースに入れた自分を褒めてあげたい。近くのホテルのお土産屋さんも見回って、「北海道ジンギスカン」の文字とイラストが印刷されているTシャツを衝動買いした。兄へのお土産にしようと思う。

(文責：岡 夏希)

3日目－9月17日

昨日の夜は数人で『ファーゴ』という映画を鑑賞した。真冬の時期に、狂言誘拐が巻き起こす悲喜劇を扱ったこの作品が、気温が少し低めの北海道に、暖房をつけながら見るのは雰囲気的には最適だった。見た後も映画の内容や自分の感想について意見を交換し、映画に反映されたアジア系への偏見も再意識した。ある意味で、このプログラムを通して、多種多様なコミュニケーションができて、非常に貴重な経験をした。

この日の予定は知床方面の巡検であり、朝は普段より早く集合した。昨夜遅くまで映画を見たせいで、車中睡魔に襲われた。出発から一時間が過ぎ、小清水原生花園に着いた。風が強く吹いていたが、参加学生達とともに海岸線を散策し、多彩な貝殻を拾った。その後、斜里町立知床博物館を訪ねた。そこで、知床周辺における歴史民俗の変遷の概略を知り、動植物の模型を通して、独特な生物多様性を学んだ。また、博物館展示の説明からは、この日最初に訪れた小清水海岸の砂浜が、日本全国約20カ所が知られている「鳴き砂」の代表で



世界遺産 知床見学 (知床峠にて記念撮影)

あることが分かった。確かに、先砂浜を歩くとキュッキュツという音がした、と後で気付いた。小清水海岸の砂の供給源は独特で、屈斜路火山の火砕流であったようである。博物館本館に隣接して斜里町の姉妹町の交流展示室が設置されている。日本東北端の知床国立公園に対する西南端の西表国立公園の所在地である沖縄県竹富町、そして津軽藩士北方警備の縁で結ばれた青森県の弘前市は斜里町の姉妹町であり、北海道にいながら、青森のねぶた祭と沖縄の伝統文化も楽しめた。その後は、斜里町に所在する「知床里味」で北海道ならではの食を味わい、一休みをした後、世界自然遺産エリアのある知床半島へと向かった。

まず、ウトロに所在する知床世界自然遺産センターでは、知床半島を簡単に紹介する展示室を見学し、野生動物保護や外来種侵入防止のための注意事項について学んだ。その後、知床峠に向かうため、細かく蛇行する山道を車で上っていくと、周辺の植生は鬱蒼とした広葉樹林・針広混交林からダケカンバやハイマツの低木林に変わっていった。そして、天気も次第に変わっていく。低標高地では元々晴れていたが、上に進むにつれて次第に霧(雲)が濃くなり、峠に着くと近くの物ですら目視困難な状況になった。車から降りると、麓の暖かさとは異なり、一気に東京の真冬時ぐらいに気温が下がった。強い風に吹かれて、霧にむせぶ羅白岳の景色を想像しながら、集合写真を撮った後、すぐ車に戻った。山腹まで降りると、天気がまた晴れてきた。知床五湖の高架木道を散策しながら、知床連山及びオホーツク海の風景を満喫した。最後は帰り道でオシンコシンの滝に寄り、海沿いの夕日を見た。この一日中、真夏から真冬まで四季の天気をすべて経験し、知床ならではの体験をした。賑やかな環境で多忙な生活を送ってきた私たちは、徐々に自然を眺めていくと、無意識に悩みを一時的に忘れ、落ち着いた自分と対話する貴重な機会をもらった。

(文責: 周 佳穎)

4日目 - 9月18日

目が覚めると雨音が聞こえ、宿舍の窓から見える木々の葉

は前日までよりも微かに色づいていた。

午前中には、予定されていた屋外での活動に代えて研究室で勾玉製作を体験した。原石に下図を描いたのちに紙やすりにかけ、徐々に湾曲した形を削り出していった。目の粗さの異なるやすりを使い分け、およその形ができた後で角張った部分を滑らかにした。かなり根気のいる作業で、私はかなり早い段階で何も考えず無表情のまま手を前後させ続けるだけの境地に達してしまっただが、職人さながらの目つき・手つきで作業を続ける他の学生の姿が印象的だった。

この日使った原石は滑石という柔らかい鉱物であり、紙やすりで難なく削ることができた。常呂町の遺跡からは縄文時代の勾玉が発掘されている。それらは、原石の翡翠の原産地である糸魚川・青海地域で加工され、運ばれてきたのだそうだ。翡翠は鉄と同程度の硬度を持つ鉱物であり、砥石を用いて加工したというから、相当に手間を要する製品であったことがうかがえる。長い歳月を経て発見された遺物が作り出された過程に注意を向けることは多くなかったため、体験を通じて大昔の動的な営みを意識する良い機会になった。



勾玉の製作体験

午前11時ごろからは小一時間車に乗って博物館網走監獄へ向かい、まず監獄食堂といういかつい名前のレストランで昼

4 受講者レポート ①



博物館見学（博物館網走監獄にて）

食を取った。そこで提供される食事の一部は網走刑務所で受刑者に与えられているのと同じメニューだという。さんまの塩焼きを主菜にした監獄食をおいしくいただくことができた。

午後1時前からは博物館網走監獄を見学した。網走監獄は1890年に開設された。当初本州から移送されてきた1200人の囚人らは、北海道開拓の基盤となる中央道路の開削にあたった。その後1984年まで刑務所として使われていた建物を保存しているのがこの博物館だ。展示の中で特筆したいのは、旧庁舎内の「典獄は語る」と題された映像展示と、そのほど近くに保存されている旧網走刑務所職員官舎という建物だ。

まず、「典獄は語る」は、旧典獄室内のスクリーンに投影された人物が網走監獄の設置経緯を解説する映像だ。典獄とは現在で言えば刑務所長のことである。イズミあるいはイツミとだけ控えめに名乗るその人物が実在の典獄をモデルとしているのかは不明だが、彼は書かれたセリフを脚色された仕方で見せている。

この展示は興味深い作りをしている。典獄が博物館創設にあたっての願いを代弁する形を取っているのだ。最後の典獄を自称する彼は、開拓のための過酷な労働に耐えた人々とは異なる時代を生きていたと思われる。それでも彼は言わば典獄室で囚われの身となることを選び、博物館の意義を訴え続けている。旧典獄室を生かすための発案だったのだと思われるが、使命に身を捧げる亡霊のような展示の構造が面白かった。

次に、刑務所職員官舎はその名の通り網走監獄で勤務していた職員が暮らした長屋を再現した建物だ。明治45年に建てられた官舎では、9坪の家で看守らが家族を伴って生活していたという。狭い官舎で暮らす一家が人形となって往時の様子を伝えていた。

この展示を挙げたのは、監獄で暮らした人々は受刑者だけではないという当たり前のことに気付かされたからだ。監獄は受刑者の生活の場となると同時に、職員やその家族の生活とも深いかわりを持つ施設だ。開拓の前線を担った時代から様々な変化に晒される中、監獄に日々の生活の基盤を置いていた人々の存在を確かに伝える展示であり、強く印象に残った。

こうして常呂で過ごす4日目終了した。持ち帰ったパンフレットに印字されたロゴの「網」の字が「綱」にしか見えないことがやや気になっている。

（文責：和久井 亮）

5日目－9月19日

昨日とは打って変わっての快晴となった。長袖のヒートテックとシャツを着ていたが、日中汗ばむほど良い天気だった。

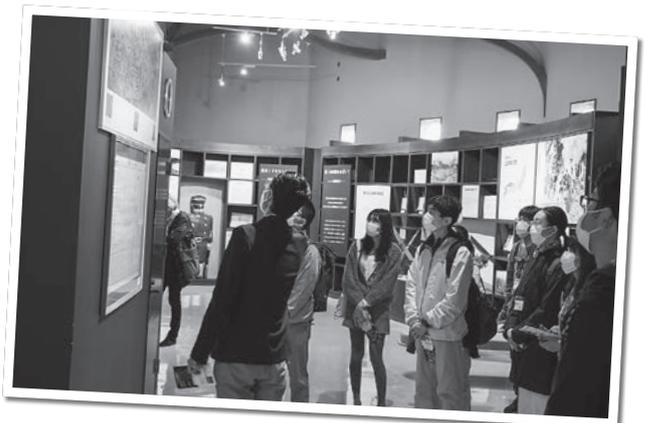
車で移動していると、広大な自然の中に、突如として不思議な外見の大きな建造物が現れた。湧別町立郷土博物館「ふるさと館JRY」の建物だ。学芸員の林勇介さんのお話を伺えば、人口と自然の調和、つまり開拓を象徴した造形や素材選びをしているそうだ。館内の展示もとても凝っていて、ジオラマの多さと細かさには、目を見張るものがあった。ついついじっくり眺めてしまい、他のメンバーを見失いかけた時は、本当に慌てた。北海道開拓に従事した、屯田兵の家族が「（もんぺ文化のない愛知県出身者が、山形県の人々のもんぺ姿をはじめバカにしていたが、ひと夏越えて）もんぺをはいたら虫なんかに食われなかった」と言った、というお話が紹介されていた。2日目の日誌で、蚊から首を守るために髪の毛を下ろした話をしたが、今も昔も、虫に悩まされるのは同じだと笑ってしまった。

また、これも2日目の活動で、36㎡の堅穴住居が住む人の人数に対して狭いのではないか、という話を書いた。対して、今回中に入らせていただいた屯田兵屋は、50畳ほど（約91㎡）あり、そこに1世代大体5～6人で暮らしていたらしい。しかし、林さんが、「これじゃあ狭いですよね？」と皆に聞かされると、私の脳内は混乱した。時代のせいなのか、1つ1つの規模が大きい北海道という土地柄なのか……。

博物館を泣く泣く出発した（本当に充実した展示内容で、あと3時間はいられた）後は、北海道の豊かな自然を巡った。特に、網走のサンゴ草の赤が目には焼き付いている。最初に行った能取湖岸にあるサンゴ草群生地では、近くで採れたホタテやツブ、ホッケの網焼きが食べられた。注文したツブは、大きくて、熱々で、とても美味しかった。続けて向かった、ワッカ原生花園では、冷たくて甘いソフトクリームを食べようと車内で話していたが、緊急事態宣言の影響でワッカネイチャーセンターが休業し、食べることができなかった。

夜には再びサロマ湖を訪れた。今度は夕焼けから1時間以上粘って、夜空を観察した。とても綺麗だと思った。星もさることながら、月が美しかった。明後日は中秋である。名月への期待が高まる。

（文責：岡 夏希）



博物館見学（湧別町ふるさと館JRYにて学芸員の解説を受ける参加者）



常呂実習施設周辺の遺跡見学（トコロ貝塚にて）

6日目－9月20日

午前はアンネグレート・ベルクマン先生による日本伝統演劇に関する座学「History and Fiction in Japanese (Traditional) Theatre: The case of Aterui -Business as usual?」を受講した。蝦夷の族長とされた阿弼流為を主人公として創作した作品を取り上げ、文化資源学の観点から演劇全般の定義を把握しつつ、能、文楽、歌舞伎など伝統芸能それぞれの特徴や本質となる文化精神について学んだ。人、神、鬼の間で不可分の関係から生まれた歴史から見る現実社会と虚構世界を構築された趣向が、一人一人の想像に繋がっていることを感じた。講義後は、一部の人が研究室で劇団新感線により歌舞伎化された「阿弼流為」を鑑賞した。伝統的な歌舞伎と全く異なり、今まで見たことがない歌舞伎の形式であったが、現代音楽や舞台照明が活用されており、伝統的な歌舞伎表現や動作もストーリーに合わせて分かりやすく理解できた。日本の劇団制度から見る歌舞伎の発展と将来のことについても考えさせられる機会となった。

午後は常呂町内の遺跡を巡検した。旧石器時代の石器が出土した岐阜2遺跡、縄文・続縄文時代から擦文・オホーツク文化期の竪穴住居跡が混在している史跡常呂遺跡、縄文時代中期に残されたトコロ貝塚、アイヌ文化時代のチャシの痕跡が残るトコロチャシ跡遺跡を転々と見回ってきた。それらの遺跡を見学してみると、しばしば歴史の重層性をみることができる。例えば、史跡常呂遺跡の森の中で近代の開拓が行われた際に、一部の竪穴を埋めて、建設した道の様子が見られる。トコロ貝塚層の上下には、縄文時代早期の石刃鎌文化から縄文時代晩期までの文化層が発見され、そこでは気候変動の状況とともに移行する生活や文化の変化が読み取れた。多くの遺跡が川や湖などの水源近くに密集しており、人間の営みと自然との調和を感じた。考古学や環境学などの各分野から統合的な知識で遺跡のことを考える必要があると思った。その後はサロマ湖の周辺環境に対する理解を深めるため、キムアネツ崎を訪れ、植生群落や風景を見学した。一日の最後は、サロマ湖沿いに素晴らしい入り日を満喫し、その日は早めに休んだ。

（文責：周 佳穎）

7日目－9月21日

新型コロナ感染症の流行が影響し、外部講師を招いてのワークショップはZOOMでのオンライン開催となった。講師はカリフォルニア大学バークレー校の羽生淳子先生が担当し、「Food Diversity, Ecosystem Resilience and Cultural Heritage Landscapes」と題してレクチャーが行われた。学生達は学生宿舍の個室や食堂、常呂実習施設研究室に分かれて、各自パソコンに向かい、参加した。羽生先生の専門とする縄文時代の遺跡や当時の人々の生活や技術などの考古学的研究に基づきながら、歴史生態学(historical ecology)の概念、民族誌(ethnography)や農業生態学(agro-ecology)など、多角的視点から過去と現在を捉えるという先端的な研究が紹介された。多様な観点・価値観から現象を考える大切さと重要性について学んだ。

昼ご飯後、みんなが研究室で集まり、修了式が行われた。一人一人呼び出され、立派な青い表紙の修了書を受け取りながら写真を撮ったりし、まるで卒業式のような雰囲気だった。

修了式が終わってすぐ、佐呂間町のサロマ湖展望台で景色を楽しむ企画があったが、レポートを書き終わっていなかった学生達は残念ながら参加できなかった。レポートを書きながら振り返ってみると、北海道で過ごした8日間はとても充実していて、本当にあつという間に過ぎてしまった。気候やコロナなどによって、プログラム内容が多少変更されたが、オホーツク地方や網走で遺跡の巡検や博物館を見学したり、東京ではあまり見ない動植物を見たり、勾玉を作ったりし、とても貴重な体験をした。また、自分の専門ではなかなか触れないことも色々学べて、とても楽しかった上に、勉強になった。

コロナの対策として、昼ご飯や夜ご飯はみんな一緒に食べられなかったが、夜のフリータイムで映画を見たり、意見を交わして色々議論をしたり、交流の機会はたくさんあった。学生達のバックグラウンドもそれぞれ異なり、自分とは違う学部・学科や学年の新しい友達ができたり、他の国の留学生と交流することもでき、とてもいい思い出になった。

プログラム自体が中止されるかされないかという大変な時期に、学生達がプログラムに参加できるように関わっていただいた先生方、TA、関係者の皆様、本当にありがとうございました！

（文責：CHIA KAH YING MONA）



修了式の様子

4 受講者レポート ②

■ テーマ別レポート

岡田 悠暉、北里 萌音、小池 晃弘、田村 天

1. 時の聲に耳を澄まして

「過去を聴こう 未来を視よう」常呂でのプログラム5日目に訪れた湧別町立郷土博物館ふるさと館JRYの看板には、こんなことが書かれていた。まずはこの言葉をきっかけとしつつ、2021年度東京大学文学部夏期特別プログラム内容に即して、歴史と向き合うことについて考えてみたい。

私は歴史や遺物と向き合うことはある種の「対話」とであると考える。「対話」という言葉は、向かい合って話し合うことを指すため、実態のない歴史という概念や、無生物である遺物と向き合うことは本来的には「対話」ではない。ただ比喩的に「対話」という表現が用いられ、私も使っているのは、しばしば過去は私たちに大切なことを伝える媒介となるからではないだろうか。すなわち、過去の人の営みや考え方を記録し、後世に生きる私たちに伝えている様子を「発話」として捉えることができると考えているのである。また、私たちが過去を学び、こうして文章を書いたり、表現したりすることも、私たちが歴史や過去の遺物に対してなされた「発話」として捉えられる。先に述べた看板の言葉は、過去の聲に耳を傾けた上で、未来へ向けた態度をとるということであり、これも「対話」という考え方を適用できる。こうした考え方を念頭に、以下では「対話」の意味を拡張した上で、議論を行いたい。

「対話」といえば、東京大学総長の藤井輝夫先生が大学運営におけるテーマとして掲げている言葉である。藤井先生の目指す「対話」とは何を指すか、という疑問に対し、令和2年度入学者歓迎式典での式辞によれば、3つの意味があると説明している。1つ目は真理に到達し問題を解決するために協同すること。2つ目は「対話」の相手を全体として受け止め、問いかけを共感的に理解すること。3つ目は多様な聲を響きあわせ、新たな価値を生み出すこと。この解釈を本稿でも採用する。

プログラムにおいて1つ目は、考古資料に基づいて過去の文化や暮らしを探ることを指している。北見市のところ遺跡の森およびところ遺跡の館で見学した住居跡や土器などからは、当時の人々の生業や住まいを読み取ることができ、私たちはその様子を再現しようと思いを巡らせた。ところ遺跡の森には復元住居があり、ふるさと館JRYではジオラマが印象的に展示さ



常呂実習施設周辺の遺跡見学（ところ遺跡の森の復元住居）

れていた。博物館網走監獄では囚人の労働が具体的に映像化されていて、当時の過酷な労働に思いを馳せることができた。

2つ目は、過去と向き合う際に多角的視点を大切にすることを指している。資料の伝えるものが私たちの想像と異なっても、それを見なかったことにするのではなく、尊重し、ともに考えるということだ。特に時代の解釈として現れる例がわかりやすいのだと思うが、アイヌと和人の関係、屯田兵が北海道に与えた影響などは考え方によって異なる理解ができよう。博物館網走監獄では、囚人に課した労働によって多くの犠牲がでたことを、反省的に捉えていた。単に北海道の発展に寄与した面だけでなく、その裏側にも思いを馳せることが大事なのではないだろうか。

3つ目は、さまざまな歴史やその資料に触れることで、新たな価値観を各々が得て、生み出すことができる、ということである。プログラムの中では、考古学だけでなく多様な観点から各地の博物館や自然と向き合ったが、それぞれの場所で実に多くのことを感じる事ができた。北海道の自然環境はどのようなものか。どのように展示品を保存・公開していくべきか。こうした問いを考えていく中で、これまで興味を抱けなかったような分野に関心をもったり、これからの自分の大学生活での学びを見直したりすることもあった。これからの人生に活かしていくことで、また歴史に新たな意味を付与することができるだろう。

私たちがプログラムで体験してきたことは、歴史を相手とした「対話」という営みであり、それは上で述べた3つの観点から捉えられる。冒頭で紹介した標語のように、歴史と向き合うことは、ただ過去で完結しない。未来に向かってこそ、「対話」の取り組みなのである。私たちの営みも、プログラムを超えて続いていくのである。



能取岬よりオホーツク海を眺める参加者

ここまで歴史と向き合うことを考えてきたが、「対話」は歴史以外でも行われる。参加者間の会話もまた「対話」である。次は人と向き合うことについて考えたい。

コロナ禍は人と人との関係を問う契機となったが、改めて考えてみれば、直接向き合っただけの「対話」には、以下のような大きな価値があると思われる。1つ目にはより良い結果を導ける

ということ。2つ目には他者の理解を深められるということ。3つ目には新たな価値を作り出せることである。それぞれは、藤井先生の挙げた3つの「対話」の意味と共通する部分を持つ。

プログラムにおいて1つ目は、同じ体験を共有し、お互いに意見や感想を交わすことで、理解や感動を深められる、ということを指している。3日目に訪れた知床では、自然景観の美しさを同じ場所、同じ時間で堪能することで、より記憶に残る出来事として体感することができた。

2つ目は、他人を尊重し理解できるようになることを指している。オンラインのイベントや会合では雑談を挟むことが難しく、新しい出会いがあったとしても、表層的な関係に止まってしまうことが多い。その一方、対面では人と話す中で、バックグラウンドや考えの枠組みを知ることができ、より他者の関係を深められることが多い。今回の参加者の中にはオンラインでは顔を合わせたことがあるものの、対面ではあまり会っていない知り合いもいたが、今回のプログラムを通して親交を深めることができた。

3つ目は、人と協力し合うことで、未来に向けた新たな創造ができるということである。私たちが協力して作り上げた成果はこのレポートであり、また実習施設で記入したフォトアルバムであるが、こうした創造はまだまだ途中である。このプログラムの終了後も、各々が各自のフィールドで新たな価値を生み出していくのだろうが、また集まって皆で何かできたらいいと考えている。

今年度は制限も多い中でのプログラムではあったが、共に作り上げ共有した時間は、非常に貴重なものとなった。やはり充実した時間の裏には、人と人が出会って「対話」することが重要なのであろう。1日でも早く対面での活動を広げられる日常が帰ってくることを祈りたい。

最後に。このレポートが公表される頃には、プログラムは終了している。すなわちこれは過去の記録だ。あなたはこれを読み、どんな「対話」をしただろうか。そしてこれから人とどんな「対話」をするのだろうか。時の聲に耳を澄ませて向き合ってみて欲しい。

【参考文献】

JapanKnowledge Lib デジタル大辞泉「対話」
東京大学「令和2年度東京大学入学者歓迎式典総長式辞」
(https://www.u-tokyo.ac.jp/ja/about/president/b_message2021_09.html)

(文責：岡田 悠暉)

2. 文化・民族・国境

国家は国境で区切られている。しかし、国同士の境界部は曖昧で流動的である。北海道北見市常呂町周辺の歴史は、普段意識することのない国境について注意を呼び起こす。私自身あまり国境を意識したことは今までなかったので、良い経験になった。ここでは、民族や国家の境目という点に注目しつつ、常呂周辺の歴史に関して簡単に述べたい。

常呂の歴史は、旧石器時代に遡る。それから縄文時代、続縄文時代、擦文文化と歴史は連続していった。常呂の遺跡や膨大な量の考古資料には驚かされた。縄文・続縄文時代や擦

文文化では、本州と大きな距離がありながらも、しばしば似た特徴を持つ土器が利用されたことが明らかになっている。しかし、オホーツク文化の遺物では本州の考古資料とは全く別のものに思えた。このプログラムで訪れた東大常呂資料陳列館、ところ埋蔵文化財センター、ところ遺跡の館は土器・石器・骨角器の山々には埋め尽くされていた。史跡「常呂遺跡」の中には約2700基の窪みがある。それらほぼ全てがかつての住居跡だというのであるから、そのスケールの大きさには圧倒される。

この常呂出土の資料の中でも、特に目を引いたのはオホーツク文化の骨角器である。クマの頭骨を重ねた祭壇(骨塚)や角の先端を加工した彫像など、どれも特殊で本州では見たことがない。そしてクマやオットセイのミニチュアは写実的でありながら、可愛らしさも感じられる。動物の骨や角で作成された回転式離頭銃を投げ、クジラやオットセイを捕獲する人々の姿はきっと勇ましいものであったと想像する。

オホーツク文化は、アムール川下流域やサハリン方面から南下した集団によって営まれたと考えられている。このオホーツク文化は、考古学的にみてアイヌ文化の母体とされる擦文文化と融合し、やがて吸収されたとみられている。オホーツク文化の熊信仰が影響してアイヌ文化のイオマンテが成立したとする説もあるようだ。このような集団の移動・文化の融合や変遷を見ると、今日的な国境は彼らを縛っていなかったことに気付かされる。恥ずかしながら、私はこのプログラムへの参加を決めるまでオホーツク文化の概要すら知らなかった。



博物館見学
(ところ遺跡の館でオホーツク文化期の展示をみる参加者)

近世には、この付近に和人も住むようになった。旧ロシア帝国の南下政策に対応するため、明治政府は北海道の開発を推進した。博物館網走監獄では、囚人たちが過酷な条件下での道路建設などの労働に従事したことを視覚的にわかりやすく展示されていた。網走監獄といえば近代的な建築物が想像されやすいが、初期に道路建設現場で作られた粗末な小屋も再現されており、極寒、栄養不足、睡眠時間が4~5時間の環境で看守の監視下に重労働を課せられた囚人の苦しみ・負の歴史を包み隠さず示している。

屯田兵は北海道各地に入植したが、湧別町の博物館には当時の住居や銃が残されており、当時を知る貴重な資料となっている。屯田兵へ支給された家屋は、本州以南の和式を踏襲しており、北海道の冬の寒さへの対応が充分になされないまま開拓が始まったことがわかる。この地で伝わってきた実物の

4 受講者レポート ②



博物館見学（博物館網走監獄にて）

銃は、主権国家体制に日本が飲み込まれる中で、ここが国境警備の最前線となった史実を緊迫感とともに見学者へ伝える。

東大文学部の常呂実習施設を拠点に実施されたこのプログラムは、民族や文化にかつて国境がなかったこと、そして国境が作られてきた歴史を実感させられるものであった。

（文責：小池 晃弘）

3. 資料の価値を伝えること

本プログラムは、私にとって非常に挑戦的なものであった。私は美術史学を専門としており、将来は美術館で学芸員として活動することを志望している。そんな私が普段訪れる文化施設はもっぱら美術館が多い。しかしこのプログラムでは、考古学を始めとした専門外の領域を扱う、実に様々な施設、史跡、自然公園を訪れた。このことは私にとって異分野交流とも呼べるものでもあり、刺激的な体験をすることができた。本レポートでは、まず常呂でのプログラムを通じて学んだことをまとめ、次に資料を保存し、その価値を未来へ伝えることの重要性について述べたい。

本プログラム中で特に印象に残ったのはなんといっても考古遺跡である。ところ遺跡の館およびところ遺跡の森での擦文土器などの考古資料や、竪穴住居跡、復元住居の見学を通じて北海道の先史時代の生活についての理解を深めることができた。また、町内各所の考古遺跡をめぐり、常呂という土地では昔から実際に人が生活を営んでいたのだということを強く実感した。

プログラム中に訪れた博物館では主に歴史、民俗資料を見る



世界遺産 知床見学（知床五湖にて）

ことができた。博物館網走監獄では、実際の建築や、囚人を模した人形等を通じ、北海道の開拓に対する囚人の寄与や、生活、地域との関わり方について学んだ。湧別町立郷土博物館ふるさと館JRYでは、実際の屯田兵の家屋や、屯田兵に関する様々な遺物、当時の人々の声を記したボードなどを通じ、屯田兵の歴史を立体的に知ることができた。また、常呂町郷土資料館や、斜里町立知床博物館では地域の産業や暮らしを伝える様々な資料に触れることで、その地域の生活を実感することができた。

プログラム中には多くの自然公園を訪れた。東大常呂実習施設のすぐ隣にあるサロマ湖や、能取岬から望むオホーツク海、知床の山々の景色は素晴らしいものであった。巡検を通じ、豊かな自然の素晴らしさを実感すると共に、人間と自然との関わり方について改めて考えさせられた。

このように、常呂での生活を通じて私は歴史、民俗、考古、自然史など様々な領域から多くのことを学ぶことができた。だが、とりわけ印象的であったのはこれら貴重な資料を保存することに伴う困難や、それに対する人々の努力を感じたことである。例えば、常呂の考古遺跡に関しても、先生方から竪穴住居跡の復元や遺跡としての保護にまつわる土地の購入のための費用に関する問題についてお話を頂いた。また、貝塚を保護するために表面にネットを掛ける、地元の人達の協力で遺跡の周りの草むしりをしているといった資料の保護の実践例について学んだ。博物館網走監獄は、改築に伴い取り壊されそうになった監獄の歴史を保存するために当時の網走新聞社主が保存事業を始めたことが設立のきっかけだという。貴重な歴史資料を保存するための人々の努力を感じることができ、感銘を受けた。プログラムでは、多くの国立公園、国定公園を訪れ自然保護の実例にも触れることができた。また、常呂町郷土資料館では、民俗資料に関する知識不足のために資料の整理が不十分になってしまっているという資料保存の困難さについても実感した。

プログラムを通じて学んだ、歴史、民俗、考古、自然史など様々な領域の事柄は、確かに文献からも知ることができる。しかし、現実にモノとして存在する資料を前にすることで、「今、ここに」存在するものとして実際に生きてきた人々の生活、あるいは自然を実感することができるだろう。そうして、考え、理解することで、文献だけでは知ることのできない様々なことも学ぶことができるはずだ。だからこそ、多様な資料の価値を伝えていくために、資料を保存することが重要である。常呂でのプログラムは、資料の価値を未来へ伝えていく重要性という、基本的だが、本質的なことを学ぶ大変貴重な機会となった。

【参考文献】

博物館網走監獄「ごあいさつ」(https://www.kangoku.jp/about_us.html)

環境生活部環境局自然環境課「網走国定公園の概要」

(<https://www.pref.hokkaido.lg.jp/ks/skn/environ/parks/abashiri.html>)

（文責：田村 天）

4. 文化施設を歩いて

私は将来博物館の展示・教育企画の制作に携わりたい。文

学部夏期特別プログラムへの参加を希望したのは、考古学・歴史文化遺産への好奇心に加え、滅多に訪れることのない北海道の博物館や遺跡のあり方を文献ではなく自分の目で知る機会を得たかったからだ。



常呂実習施設周辺の遺跡見学
(整備中のトコロチャシ跡遺跡を見学する参加者)

このレポートでは各文化施設を訪問して考えたことを述べる。北海道とそこで生きてきた人々の有り様についても未知のことばかりで非常に感銘を受けたが、その類の学習内容については他の参加者の記述があるため、そちらを参照されたい。以下、文化施設訪問の感想を3点に絞って述べる。

まず、未完成的な資料館や遺跡公園の様子を垣間見たことは貴重な経験であった。これまで私は小綺麗にまとめられ完成された博物館や類似施設ばかり訪れていた。しかし常呂町郷土資料館では、資料に解説や明確な分類を付さないままで発展途上の陳列展示を見た。資料名のみ付され所狭しと並んだ品々の中には用途や来歴の分からないものも多々あったが、解説がない分真剣に観察することになった。解説が念入りな観察を妨げる可能性など、解説の功罪が指摘される中で、解説や分類が明確でない状態の展示を見るのも1つの良い経験になった。これに加えトコロチャシ跡遺跡は遺跡を公園に整備する過程にあり、柵、復元住居や歩道ができる前の姿を目にすることができた。学芸員資格取得のための博物館実習で数年後にこの地を再び訪れ、施設や公園の整備前後の姿を両方知る経験を得たいと思っている。

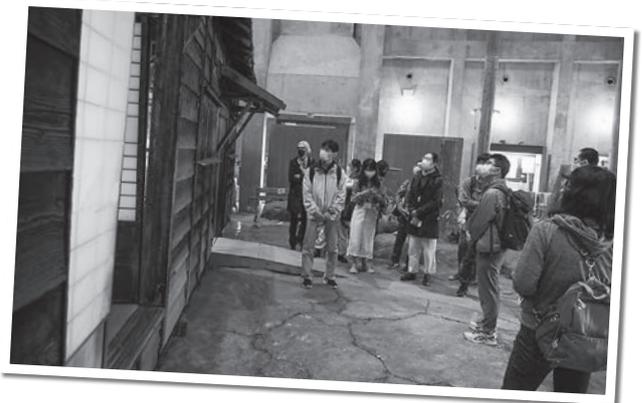


博物館見学 (常呂町郷土資料館にて)

また、短期間にひとつの地域の施設を複数回することで、各施設の役割の違いを実感した。例えば知床博物館と知床世界遺産センターは同じ地域を扱っているが、後者はガイダンス施

設として展示の情報量を絞り、観光においてのマナー提示や注意喚起に重心を置いている。また、常呂資料陳列館はその資料展示において、一般向けの説明は同地域に位置するところ遺跡の館に任せ、学術的な解説を重視しているという。このように異なる目的のもと同じ地域を扱う施設・展示を複数見比べることで、文化施設についての図書で表と文字によって述べられていた各種文化施設の特徴を消化できたように思う。

さらに、今回のプログラム全体を通して各文化施設が地域と密接に関わり合っているように感じ、私はこれを地域の文化施設のあり方としてとても素敵だと思った。特に湧別町のふるさと館JRYには、町民からの聞き取りや「これからの町はどんな町?」と題した湧別の近年の生活の様子展示、湧別の屯田兵の肖像画の展示がある。屯田兵らの子孫は肖像画を訪ねて館を訪れるという。また、ふるさと館JRYは、町民が個々の課題を持ち込んだり歓談・相談をしたりできる「町民のサロン」化を志向し、その活動の結果として町民自身による調査・町おこしの活動・資料の寄贈が行われるようになった(中村2003: 90-92)。さらに湧別町では常任の学芸員が定年まで続けて勤務することになっていると聞いた。その雇用形態が、学芸員が時間と手間をかけて地域の人々との信頼関係を作り上げる基盤となっているのではないか。このように北海道では地域と博物館との密な関係構築の一端に触れることができた。



博物館見学 (湧別町ふるさと館JRYにて学芸員の解説を受ける参加者)

以上3点の感想は外から見ればとるに足りないものに過ぎないかもしれないが、私にとってはとても大きな気づきであり学びであった。オンライン開催となるプログラムばかりのこの時代において、自分の足で北海道の土を踏み、この目で展示や遺跡を確かめ、同年代の参加者と面と向かって語り合う時間はいつにも増して貴重なものであった。

感染症対策との兼ね合いを取りながら今回のプログラムを催行し、プログラム中にあらゆる面で私たちの活動をサポートしてくださった教職員・TA・関係者の皆様への感謝を述べてこのレポートの結びとしたい。本当にありがとうございました。

【参考文献】

中村 齋 2003 「生涯学習と博物館：上湧別町ふるさと館JRYの実践から」(＜特集＞地域社会における生涯学習の課題と展望)『生涯学習研究と実践：北海道浅井学園大学生涯学習研究所研究紀要』4巻、pp.90-92

(文責：北里 萌音)

ウイズ・コロナの特別プログラム

今年の文学部夏期特別プログラムが無事終了した。前回イギリスの地で実施した冬期特別プログラムは2020年2月前半であったから、それ以来ほぼ一年半ぶりの実施であった。いまさら多言を要しないが、この冬期プログラム直後から世界中で蔓延した新型コロナウイルス感染症の影響は実に深刻で、2020年度の交流プログラムは全て中止に追い込まれた。今年度も実施が危ぶまれていたが、周到なコロナ対策のもと、研究科ならびに大学本部のご理解のもと、例年通りとはいかなかったが実施することができたことは幸運だったと思う。

本プログラムは本来、文学部と英国セインズベリー日本藝術研究所との間で締結している部局間交流協定に基づいて、主として考古学と文化資源学に関する学習を通して、さまざまな現地体験を共有しながら、日本とヨーロッパの学部学生に国際交流の実を体得してもらうことを主眼としているが、本年はいささか異なる形とならざるを得なかった。例年プログラムは、夏期(9月2週間)に東大、冬期(2月2週間)にイギリスで開講してきたが、コロナ感染症の蔓延により日英間の渡航がほぼ不可能になったため、今回は東大にすでに来日している学部留学生を対象として、夏期のみの実施とした。例年ならば、夏期は本郷キャンパスおよびその周辺で展開する前半の1週間と、研究科附属常呂実習施設で行う後半の1週間の二部構成であったが、コロナ禍の影響による活動制限が強化されていた東京を避けて、全日程を北海道東部の常呂で開催することとした。

9月14日から22日までの9日間と短期間ではあったが、教養学部5名(前期課程4名、後期課程1名)と文学部3名の8名が参加し、うち2名が留学生(中国、シンガポール)であった。道内においてもいくつかの博物館等は閉館または入館制限の措置が取られていたため、野外の遺跡や歴史遺産、自然遺産の見学を充実させる日程をとり、ところ遺跡の館、博物館網走監獄、湧別町立郷土博物館、知床博物館等や国指定史跡「常呂遺跡」、世界自然遺産「知床」等の見学を行った。また通常の座学や体験実習とは別に、今回はカリフォルニア大学人類学部の羽生教授による歴史遺産に関するワークショップを実施した。本来ならば教授を招聘する予定であったが、ZoomによるオンラインWSとせざるを得なかった。

例年通りプログラムは全て英語で行われたが、三密対策のため全員が集まったの討論や食事・交流活動は制限せざるをえず、事前の抗原検査や体調管理を義務付けたので、受講生にはさまざまな負担をかけた。それにもかかわらず、状況を理解し交流の実を遂げてくれた受講生には感謝する。受講生の感想や意見については、掲載している各自のレポートを参照されたい。本プログラムは、文学部だけではなく、広く全学部に開放されているので、来年こそは通常の交流プログラムが十全に実現できるように努力していきたい。

最後になりましたが、担当・参加・協力いただいた全ての教職員・TA・関係者の皆様に厚くお礼申し上げます。とくに今年は大変でした。

東京大学大学院人文社会系研究科・教授

佐藤 宏之



(山上あかね撮影)

東京大学大学院人文社会系研究科・文学部

東京大学大学院人文社会系研究科附属
北海文化研究常呂実習施設

〒093-0216 北海道北見市常呂町字栄浦376



東京大学 本郷キャンパス

〒113-0033 文京区本郷7-3-1



令和3年度
文学部夏期特別プログラム
(報告書)

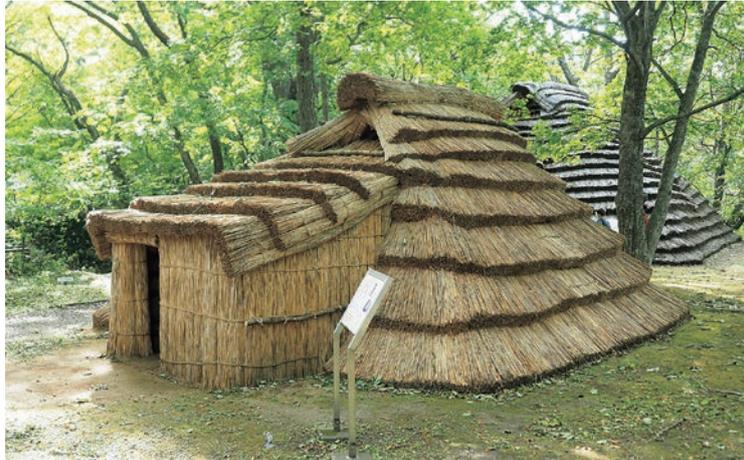
編集発行 東京大学大学院人文社会系研究科・文学部
〒113-0033 東京都文京区本郷7-3-1

発行日 2021年12月3日

印刷 ヨシダ印刷株式会社



ワッカ原生花園を歩くキタキツネ



とことろ遺跡の森復元竪穴住居

東大文

<http://www.l.u-tokyo.ac.jp/>



サロマ湖の夕日